

---

# Knight world

鬼人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Knigh t world

### 【Nコード】

N6542Y

### 【作者名】

鬼人

### 【あらすじ】

幻想、架空、伝説、そう言われてきた存在をあなたは信じますか？  
ドラゴン、ペガサス、キマイラなどこの世にはいないとされる存在をあなたは信じますか？

この物語は世界の表と世界の裏、そしてどちらにも属さない「knigh t

world」を巡る物語です。

## 序章（前書き）

初心者です。

多分つまんないです。そんなんでも読んでいただければ光栄です。

あと、某シューティングゲームの設定内容と被る部分が多々あるか  
と思います。そのへんは大目に見てください。

## 序章

この世界には、表と裏があるのを皆さんは知っているだろうか？

皆さんのような普通の人間が住む、科学技術の進んだ世界が表世界、そして太古の昔、地球上で強力な力を持っていた、神や妖怪などが住むのが裏世界である。

裏世界の住人である神や妖怪は元々は表世界に住んでいた。そのため、その頃は世界に表も裏もなかった。だが、科学技術の進んだ人間達は科学で証明できない事はすべて幻と考え、さらに強力な力を持った神や妖怪は自分達に危険を及ぼすとして、その存在を否定した。

そしてその結果、存在が希薄になってしまった彼等は、自分の存在を保つために表世界を離れ、自分達で新しい世界を創った。

これが、表世界と裏世界の誕生である。

## 第一章 目覚めし者

暗い、冷たい、体を縛り付けるのは何処までも深い闇。そんな中、レイジオンは目覚めた。

バリイイーンッ!!

ガラスが砕けるような音で、体を縛り付けていた闇が晴れた。だが、それ以外にも体を縛り付けている物があった。それは絶対零度の氷だった。目が覚めたとはいえ、この弱りきった体ではこのまま動けずに死んでしまうだろう。だがすぐに変化があった。氷が溶けている？

ドオオオーンッ!

爆風と共に体を縛り付けていた氷が吹き飛んだ。

「久しぶりだな、レイジオン」

押し寄せてきた光の波の中から誰かが手を差し出してきた。今の声には聞き覚えがある。レイジオンは差し出された手を掴んで立ち上がった。辺り一面、白銀の雪で覆われている。そこからゴツゴツした岩が幾つも飛び出している。ここは…どこだ？

「やっと見つけだせ」

レイジオンの目の前に立っていたのはかつての戦友、ガレウスだった。

「ガレウス…お前…」

「まったく、ここを見つけるのは苦勞したぜ。なんせ手掛かりが一切無かったからな」

「ということは…俺の封印は解けたのか？」

「ああ、悪かったな、七千年も待たせちまって」

七千年か、ずいぶんと長い間封印されていたようだな。レイジオンは崖の方へ歩いていった。ここは山だ、とてつもなく高い山だ。おかしい、七千年前に封印された時も山だったが、こんなに高い山ではなかった。

「ガレウス、ここはどこだ？」

それを聞いたガレウスは苦笑いを浮かべた。

「そうか、七千年も封印されてたお前にはわからないか。この山はお前が封印されてる間にどんどん高くなっていったんだ。今はエベレストという名前がついてる」

「エベレストか……」

レイジオンは再び眼下を見下ろした。霧も何もかかっていないので、遙か遠くまでよく見える。

「どうやら…俺のいない間に世界は変わったらしいな」

レイジオンは空気の流れで感じ取っていた。七千年前とは明らかに

違う空気が、地上に流れていた。

「ああ、世界は今二つに分かれてる。人間の世界と、俺達の世界だ」

「世界が分かれた？どうということだ？」

「その話は後だ。それより今はここを離れないと奴等に気付かれるぞ」

「待てガレウス、その前にひとつ聞かせる。闇黒龍族ナーガはどうなった？」

レイジオンに聞かれて、ガレウスは悔しそうに顔を歪めた。

「お前が封印されてから暗黒龍族ナーガの力は弱まる一方だ。下手したら壊滅するかもしれない。そうならないようにするために、お前を探し出したんだ」

「そうか…」

レイジオンはフウツツとため息をついた。

「とりあえず、今はここから離れよう。お前の言ったとおり、早くしないと奴等に気付かれるからな」

レイジオンはそのまま崖の上から飛び降りた。ガレウスもすぐにその後を追った。

## 第二章 不審な気配

魔力で満たされた森、荒々しく逆巻く海、壊れた塔や城、それら全てを輝く大きな満月が照らしている。そんな中、スカーレット・ヘルバリオスは岩山の上に立って辺りを見渡していた。先程から、この広いナイトワールドに不穏な空気が流れている。夜行性の獣達は皆息を潜め、木々も静まり返っている。

「何か面倒な事が起きなきゃいいが」

そう呟いたスカーレットだったが、不気味な気配と異様な空気を肌でひしひしと感じていた。懐から懐中時計を出して確認したが、もうすぐ午前二時になる。一時間ほど前だろうか、妙に胸騒ぎがしたので外を見に来たのは。そして森や山脈を見て回ったが、結局何も見つからずにここに来た。

「何にも言わないで出てきたから、もしかしたら探してるかもな」

そう呟いた時だった、前方に僅かな気配を感じた。間違いない、誰かいる。だが……

「なんだ、この気配は……」

それは今まで感じたことの無い気配だった。スカーレットは吸血鬼として二千五百年生きてきた。だが、これほど闇に満ちた気配は感じたことがなかった。黙ったまま、目を細めて遙か遠くの方を見つめた。この気配はナイトワールドの住人ではない。それにしても一体何をやっているのだろうか？相手もこっちの気配に気づいていると思うのだが……



「確かめたほうが早いかな」

スカーレットは背中中で畳んでいた大きな翼を、バサツと広げた。考えていても仕方がない、そもそも考えるのは苦手だ。気になったら直接行って確かめる、今までもそうしてきたのだ。スカーレットは崖から飛び降りると一気に加速した。ほんの数秒でトップスピードに達し、一瞬で森の上を飛び去っていく。その時、気配の主が動いた。それと同時にもう一つの気配が現れた。

ドゴオオーンッ！！

巨大な爆発音を立てて、すぐ目の前で炎柱が上がった。戦ってるのか？スカーレットは飛ぶのをやめて、地面に着地した。木々の間を走り抜け、炎柱が上がった場所についた。そこは木々が開けて、まるで広場のようになっていた。

「なんだ、スカーレットか」

見覚えのある男が一人、広場の中心に立っていた。今そう言ったのもこいつだ。

「なんでお前がここにいるんだ？」

「それはこっちが聞きたいね、ナウル」

この男の名前はナウル・テスフィード、スカーレットが住んでいる（住み着いている）屋敷の主人だ。

「俺はスカーレットの後を追ってきたんだよ」

「俺の後を？」

「そう、さっき急に出ていくのを見つけたから、面白そうだったんでな」

ナウルは陽気に笑った。それより今気付いたのだが、ナウルは愛銃の「ジャステイス」を抜いていた。

「ナウル、何やってたんだ？」

「ん？ああ、戦ってたんだ」

ナウルはそう言いながらジャステイスを仕舞った。

「いや、それぐらい見ればわかるって。俺が聞いてんのはそうじゃない」

「誰と戦ってたかって？お前が探してた奴だよ」

「いや、まあ探してたって訳じゃないんだけど、気配が気になって見に来たんだ」

「まあ、お前なら気付いて当然か。俺も感じたことない気配だったもんで、お前の後追うのやめてそっちの方をつけてたんだ」

「で、どうだったんだ？」

「何がだ？」

「そいつが誰なのかだよ」

「わかんねえ（笑）」

ナウルはまた陽気に笑った。それを見たスカーレットは思わず、苦笑いしながらため息をついた。まあ、こいつが適当なのはいつもの事なのだが…

「じゃあ、せめてどんな感じだったか教えてくれ」

「ああ、男だったぜ。俺は美女を期待したんだが…痛っ！」

スカーレットはナウルの頭をぶん殴った。

「そんなこと聞いてねえよ！気配とか見た目とかを聞いてんだよ！」

「ハツハツハ、そうキレんなくて。あんな気配感じた事ないから種族はわからん。見た目はフード付きのローブみたいな着てて顔は見えなかった」

「フーン、じゃあさっきの炎はどっちがやったんだ？」

「俺がやった。ただあいつ結構足速くてな、逃げられた」

ナウルはスカーレットから目を離し、前方を見つめた。確かにあの時、攻撃は直撃したように見えたが炎が収まった時、あいつはどこにもいなかった。多分、気配を消して森の中に逃げたのだろう。

「スカーレット、とりあえず屋敷に戻ろう。あいつも消えちゃったし、ここにも仕様がな」

「それもそうだな」

二人は空に飛び上がると、ナウルの屋敷を目指した。ナウルの屋敷は、ナイトワールドの中心に広がる光の森を東に抜けた丘の上にある。

「ナウル、どうやって戦ったんだ？」

「どうやってって、どういうことだ？」

「相手から攻撃してきたのか？」

「いや、直前まで気配消しといて不意打ちしたんだ。あいつの驚き方は最高だったぜ」

そういえば、気配の主が動いたのとナウルの気配が現れたのが同時だった。それにしても……

「お前はいつ気配に気付いたんだ？」

「スカーレットが屋敷を出た十分ぐらい後だ」

「それで俺の後を追うのをやめて、そいつの後を追ったのか？」

「そういうことだ。あいつの気配がかなり薄かったから、見つけるのに苦労したけどな」

二人は森を抜け、平原の上を低空飛行で飛んでいった。しばらくすると、丘の上に立つ大きな建物が見えてきた。明かりがいつている

のでよくわかるが、屋敷というよりもはや城である。六階建ての本館は塀で囲まれ、庭の広さも半端ではない。ここからでは見えないが庭を突っ切る道の真ん中には噴水があり、さらには小さな雑木林まである。

「おっと、やばいな」

ナウルは丘を登る直前で止まった。顔には苦い表情が張り付いている。

「どうした？」

「夏目だ。俺もお前と同じで何にも言わないで出てきたから、あいつ俺等を探したんじゃないか？」

ナウルの屋敷には相摩夏目そまなつめという少女が住んでいる。スカレットも門の辺りに気配を感じた。

「確かに夏目だな。どうする？あいつうるさいぜ」

「対策の立てようが無い。俺が相手するから、スカレットは先に屋敷に戻っててくれ」

「わかった」

スカレットはニヤニヤ笑いながら、そう答えた。大体分かる、どうせまたくだらない事を考えているのだろう。二人は丘を低空飛行で登っていった。そして門の前につくと一人の少女が立っていた。夏目だ。

「ナウルーツ、降りてきなさーいっ！」

夏目は自分の頭上で止まっているナウルの向かってそう叫んだ。

「くそつ、なんで俺だけなんだよ」

ナウルは悪態を付きながら、魔力での浮遊を解除した。落ちていく時に、スカーレットが本館の方へ飛んでいくのが見えた。

「チクシヨウ！」

着地すると夏目が早足で近づいてきた。

「ちよつと、あんたどこ行ってたのよ！」

「そんな、怒んなくてもいいだろ」

「あんたね、私がどこ行くの？って聞いたのになんで答えなかったのよー！」

駄目だ、全く聞きゃいない。

「言ったか、そんなこと？」

「思いつきり言ったわよ、超言ったわよ。あんたに聞こえない訳ないでしょー！」

「…サーセン」

全く反省していないナウルを見て、夏目は呆れたようにため息をついた。

「ハア、まあいいわ。それでどこ行ってたの？」

「スカーレットが急に出ていったもんでな、それが気になって後を追っかけたんだ」

「フーン、それだけ？」

「いや、ちょっと気になることがあった。悪いんだけど、バルディヌも起こして食堂に集まってくれ」

「何かあったの？」

「それを今から話す」

「…わかった」

そう言うと夏目の姿がパツと消えた。夏目は瞬間移動という特技を持っている。一度行ったことのある場所なら、どこにでも瞬時に行くことができるという珍しい能力である。だがナウルは面倒くさいの、ゆっくり歩いていくことにした。巨大な門を片手で開け、美しい庭を通り過ぎていく。そして本館まで来ると、扉を開けて中に入った。

「フウ」

ナウルは思わずため息をついた。やっぱりここが一番落ち着く。床は一面大理石で顔が映る程ピカピカである。さらに天井から下がったシャンデリアが、その美しさに拍車をかける。二階分の天井をぶち抜いて作られた玄関ホールは有り得ないほど広い。本当に城のよ

うな広さである。丁度その時、正面の大階段から誰かが降りてきた。

「まったく、こんな夜中に何なんだよ」

そう言いながら夏目と一緒に降りてきたのはこの屋敷に住む最後の一人、バルデイス・エクステイションだ。

「俺の安眠を妨げんじゃねえよ、ハゲ！」

こいつは朝起きた時と、寝てる途中で起こされた時は頗る機嫌が悪い、いつものことだ。

「あゝはいはい、俺が悪かったよ。それより夏目、スカーレットは？」

「食堂にいるわよ」

三人は入口の扉から見て右にある食堂に向かった。これまた無駄にでかい扉を開けると、そこはこの屋敷で一番広い部屋である。千人ぐらい入れそうなほど広い部屋のど真ん中に、堂々と長テーブルが置かれている。スカーレットはそのテーブルについてワインを飲んでいた。

「やっと来たなハゲ」

どうやらこいつには会話が全部聞こえていたらしい。っていうかハゲてねえし、フサフサだし！

「次言ったらぶん殴るぞ」



「ハハハ、まあいいじゃねえか。それより、全員揃ったな」

「ああ、っっていうか全員集めた意味あんのかな？」

「…無いな」

「そうか、じゃあ俺は戻って寝る」

バルデイスは二人の会話を聞いて、引き返そうとした。

「悪いけど、全員いての貰わないと困るわ」

突然、この場にいない者の声があった。四人は驚いて部屋の中を見渡した。

「フフフ、ここよ」

ナウルは声のした自分の頭上を見上げた。そこには派手なドレスに身を包んだ女が一人、フワフワと浮いていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6542y/>

---

Knight world

2011年11月20日19時47分発行